様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　　21 年　6 月　12 日現在

研究種目：若手研究(スタートアップ)
研究期間：2007～2008
課題番号：１９８３０１１６
研究課題名（和文）　日本におけるアメリカ合衆国の精神薄弱児教育の受容と放棄に関する歴史的研究
研究課題名（英文）　A study of acceptance and renunciation of American “Feeble-minded” education in Japan

研究代表者
高野　聡子(TAKANO　SATOKO)
目白大学・人間学部・講師
研究者番号：00455015

研究成果の概要：
日本で戦前期に創設された精神薄弱児施設の中でも、先駆的な立場にあった石井亮一（1867-1937、滝乃川学園施設長）と川田貞治郎(1879-1959、藤倉学園施設長)は、当時、精神薄弱児施設の運営において先進国であったアメリカ合衆国に渡り、当地の精神薄弱児施設での教育と保護の方法について学んでいた。しかしながら、帰国後の彼らの施設運営方法、精神薄弱児施設の実践を分析すれば、彼らはアメリカの精神薄弱児教育や施設運営方法を全て受容するのではなく、選択的に搾取していたことが本研究によって明らかになった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,270,000	0	1,270,000
2008 年度	930,000	279,000	1,209,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,200,000	279,000	2,479,000

研究分野：特別支援教育
科研費の分科・細目：　教育学・特別支援教育
キーワード：精神薄弱児教育、アメリカ合衆国、精神薄弱児施設、川田貞治郎、石井亮一、知的障害者施設、知的障害児施設、知的障害児教育

１．研究開始当初の背景

(１)本研究の学術的背景

①国内の研究動向と位置づけ

国内の研究では、石井亮一が明治 29(1896)年４月～12 月と、明治 31(1898)年の２度に渡ってアメリカのミネソタ州立ファリボールト精神薄弱児(者)施設、ニュージャージー州オレンジのセガンスクール等に滞在したこと(津曲・金子, 31)、川田貞治郎が大正５(1916)年４月～大正７(1918)年 10 月までの約２年半、アメリカのヴァインランド精神薄弱児(者)施設、ペンシルヴァニア州立ポーク精神薄弱児(者)施設に滞在したこと(川田仁子,53-65)は明らかになっていた。だが、彼らがアメリカで何を習得したのか、彼らが帰国後、それらを日本に土着した文化や習慣とどのように交錯させたのかについては、残された課題となっていた。

②国外の研究動向

国外の研究では、アメリカ精神薄弱者施設に関する歴史研究の中で、川田がヴァインランド精神薄弱児(者)施設に滞在したこと(Doll, 9)が触れられている程度であった。

文献：Doll, E.E. (1988) Before the big time: early history of the Training School at Vineland, 1888 to 1949. AJMR, 93(1), 1-15.

川田仁子(編) (1989) 教育的治療学全集Ⅰ. 文化出版局.

津曲裕次・金子喜美子 (1974) 滝乃川学園の歴史－「精神薄弱者施設」史研究序説－. 社会事業史研究, 2, 15-30.

(２)本研究の動機

これまで本研究の研究者は、日本の精神薄弱児施設で実践された教育と保護の内容を明らかにするため、川田貞治郎が考案し、体系化した「教育的治療学」を研究の対象としてきた。

「教育的治療学」とは、川田が精神薄弱児を対象とし、施設(藤倉学園)内で実施した教育と保護の方法と理論である。そのため、本研究の研究者は「教育的治療学」の理論と方法を分析するに際して、その性格をより明らかにするため、同じく東京府にあった石井亮一の滝乃川学園における教育と保護の内容と比較検討も行ってきた。

その結果、石井と川田は、戦前の日本の精神薄弱児施設において先駆的な立場にあったこと、施設で実施された教育と保護の内容にアメリカとの関連性があることが明らかになっていた。

そこで、本研究の研究者は日本の精神薄弱児施設の性格を明らかにするためには、川田と石井が滞在した時期のアメリカ精神薄弱児施設の動向を分析し、その上で彼らが学んだ内容について検討することが必要であるという着想に至った。

さらに、石井の滝乃川学園ならびに川田の藤倉学園の両施設は、時期には若干の違いがあるものの、施設創設期には精神薄弱児の退所を想定していたが、創設からおよそ 20 年を過ぎるころになると、自給自足による施設内保護が具体化され、精神薄弱児の多くは終生を施設内で暮らすようになったことが明らかとなっていた。

それゆえ、日本の精神薄弱児施設が、終生保護施設化に至った経緯とその特徴を踏まえて、アメリカ精神薄弱児施設の動向とそれらを比較し検討することも必要であるという結論に至った。

２．研究の目的

日本の精神薄弱児教育におけるアメリカ精神薄弱児施設の影響を明らかにするため、①先駆者らがいかにしてアメリカ精神薄弱児施設での教育と保護の内容を受容したのか、あるいはいかなる理由から放棄したのか、②また、彼らが滞米した時期のアメリカ精神薄弱児施設の性格を検討することを目的とした。

(１)アメリカ精神薄弱児施設の教育と保護の内容・方法の受容および放棄の理由

石井亮一と川田貞治郎が、アメリカに滞在した理由とその目的について検討する。とりわけ、彼らが滞米中に何を習得し、学んだのかについて明らかにする。

石井については、滞在先について空白部分があるため、一次資料を発掘し空白部分から分析する。

川田については、ヴァインランド精神薄弱児(者)施設とポーク精神薄弱児(者)施設に滞在したことがすでに明らかとなっているため、彼の滞米書簡を史料として使用し、受容および放棄した内容と理由から分析することとする。

(２)滞米時期のアメリカ精神薄弱児施設の教育と保護の内容とその性格

石井と川田が、滞在したアメリカ精神薄弱児施設の教育と保護の内容を分析する。その際、石井と川田の滞米時期が異なるため、それぞれの滞米時期のアメリカ精神薄弱児施設の動向を明らかにすることが必要である。

そのため、石井と川田が滞在した精神薄弱

児施設の対象、目的、内容と方法について、当時の社会的文脈を鑑みながら検討することとする。対象については、精神薄弱児施設の対象設定とその実際を含む。目的については、施設の目的とその機能について、内容と方法についても施設での教育・保護の内容と方法について分析する。

３．研究の方法

研究の第一段階では、石井亮一と川田貞治郎が、アメリカ精神薄弱児施設において、いかなる教育と保護の内容を習得し、学んだのかについて分析し、彼らが受容あるいは放棄した教育と保護の内容について、帰国後の施設における教育と保護の実践内容とを比較しながら検討する。

研究の第二段階では、彼らが滞在したアメリカ精神薄弱児施設の性格を明らかにし、それらの性格と、研究の第一段階に検討した彼らが受容あるいは放棄した内容とその理由とを比べて検討する。

（１）第一段階の研究の方法

①分析１：石井と川田それぞれがアメリカ精神薄弱児施設において、いかなる教育と保護の内容を習得し、学んだのかについて検討する。

石井(滝乃川学園)については、彼の滞在先機関、時期を明らかにするため、一次資料の発掘を試みる。一次資料の発掘が実現不可能であった場合には、石井が雑誌等に投稿した原稿を収集し、石井が習得し、学んだ内容については、教育的、心理学的、福祉的観点から分析することとした。

川田(藤倉学園)については、川田が妻とくに宛てた滞米書簡を史料として使用し、滞在先機関、時期を明らかにする。さらに川田が習得し、学んだ内容については、教育的、心理学的、福祉的観点から分析する。

また、川田は帰国後に藤倉学園を創設するため、滞米時期における施設構想についても検討することとする。

②分析２：分析１で明らかになった分析結果と、彼らが受容あるいは放棄した教育と保護の内容を比較し、その理由について検討する。

石井(滝乃川学園)については、帰国後の滝乃川学園の対象設定とその実際、目的と機能、教育と保護の内容と方法を、滝乃川学園の年次報告（「その日その日」）を史料として使用し明らかにする。それらと分析１で明らかになった分析結果とを比較し、石井が受容あるいは放棄した教育と保護の内容について、理由を含めて検討する。

川田(藤倉学園)については、藤倉学園の対象設定とその実際、目的と機能、教育と保護の内容を藤倉学園の年次報告、川田の発表論文を史料として使用し明らかにする。それらと分析１で明らかになった分析結果を比較し、川田が「教育的治療学」に受容あるいは放棄した教育と保護の内容について、理由を含めて検討する。

（２）第二段階の研究の方法

石井と川田が滞在したアメリカ精神薄弱児施設の性格を明らかにし、それらの性格と、第一段階に検討した彼らが受容あるいは放棄した内容とその理由とを比べて検討する。

①分析１：石井と川田が滞在したアメリカ精神薄弱児施設の教育と保護の内容について明らかにすることを課題とした。彼らが滞在したアメリカ精神薄弱児施設の年次報告書、施設長の投稿論文を、アメリカの連邦議会図書館、州立図書館、現存する施設で収集する。それらの資料から施設の対象設定、目的、機能、教育と保護の内容、財政を検討する。分析に際しては、時期区分を設定し、施設の性格とその変化について明らかにする。

（３）資料収集の方法

本研究は、一次資料の収集が重要な作業となる。そのため、日本の精神薄弱児施設については、施設において、実際に資料収集を実施することとする。また、アメリカについては、連邦議会図書館、州立図書館、おいて資料収集し、存続する施設についてはメールを利用して連絡を取り、資料の所蔵確認ならびに閲覧を依頼することを想定した。

また、文献ならびに資料の内容を補完あるいは確認するため、戦前の精神薄弱児施設と関係があった元職員等に、あらかじめ質問項目を決め、フォーマル・インタビュー(構造化面接法)の方法で聞き取り調査を行うことを計画した。

４．研究成果

(１)研究の主な成果

①平成 19 年度の主な成果

平成 19 年度は、日本の精神薄弱児教育の内容と方法が、アメリカの精神薄弱児教育から、何を受容し放棄したのか、またその理由について明らかにするため、滝乃川学園を創設した石井亮一と藤倉学園の川田貞治郎を対象とし、彼らがどのような教育内容と方法を学んだのかについて検討した。

川田の場合、施設運営の方針において対照的であった法人立のヴァインランド精神薄弱児(者)施設、ペンシルヴェニア州立ポーク精神薄弱児(者)施設に滞在していたため、彼が学んだ内容と、それらを受容し、放棄した理由に関して分析した。

また川田は、渡米以前から、低能児教育の

方法として「心練」を考案し実施していたため、渡米前とアメリカ滞在中の心練の内容についても検討した。

以上の分析から、川田はアメリカ滞在によって、教育的治療学という名称を用いて、精神薄弱児教育の内容と方法を具体的に構想するようになり、その構想に際しては、ヴァインランド精神薄弱者施設の研究所で行われていた精神薄弱に関する研究内容の示唆を受けていたことが明らかになった。

なお、石井が滞在及び視察した施設で何を学んだのかについては、資料収集の制約から川田ほど明らかにすることは困難であったが、石井と川田では滞在した施設運営方針の性格の違いから、以下の相違点が明らかになった。

それは、第一に石井らが滞在した施設の経営形態の違いである。川田は法人立(ヴァインランド施設)、州立(ポーク施設)に滞在したが、石井の場合は法人立(ウェイバリイ施設、エルウィン施設、ヴァインランド施設)、州立(フェリボー施設)だけでなく、私立施設(セガン学校)を視察しているからである。

第二に、彼らが滞在した施設規模である。川田が滞在したヴァインランド施設は 400 人定員と中規模ではあったが、ポーク施設は 2000 人に近い大規模施設であった。石井が視察した施設の中でも最も大規模な施設はエルウィン施設の千人台であったから、石井は 2000 人規模の施設は視察していないのである。

第三に、介護職員としての経験であり、これは川田と石井との大きな違いである。石井は川田よりも多くの施設を視察していたものの、介護職員としての経験はなかった。川田の場合は、介護職員としての経験から、とくにポーク施設で実施されていたような本格的な自給自足を、彼の教育的治療学の実践基盤となる施設運営の構想の一部として取り入れようとするからである。

②平成 20 年度の成果

平成 20 年度は、アメリカの精神薄弱児施設において精神薄弱児教育ならびに施設運営の方法を学んだ石井(滝乃川学園)と川田(藤倉学園)が、帰国後、いかなる施設運営方針を構想し、精神薄弱児教育と保護を実践したのかについて検討した。

滝乃川学園ならびに藤倉学園の両施設では、創設からおよそ 20 年を過ぎる頃になると、自給自足による施設内保護の具体化が構想され、精神薄弱児の多くは終生を施設内で暮らすようになるが、このような終生施設としての施設機能を、石井と川田の両施設長が滞在(あるいは訪問)したアメリカ精神薄弱児(者)施設と比較した。

その結果、アメリカ精神薄弱児(者)施設でも同様に見られたが、アメリカと日本を施設規模と施設内での教育と保護の内容から比較すると、日本は必ずしも全てを受容していなかった。そのため、石井と川田の両施設長の選択的搾取があったという結論に達した。

また、両施設の教育と保護の内容は、第二次世界大戦が激化する中で、それまでと同じ施設運営を維持することの困難さに直面していた。

とりわけ藤倉学園の場合には、第二次世界大戦下にあっても、大島(東京府)の自然と入所者の作業力を活用した自給自足が実現し、川田が構想してきた教育的治療学の形成と体系化が可能な状態にあったが、昭和 19 年(1944)年 8 月 15 日に山梨県北巨摩郡清里村の清泉寮へ疎開することになる。

そのため、清里での疎開時代に保母であった者より聞き取り調査を実施し、疎開中の藤倉学園での処遇内容について聞き取り調査を実施した。その結果、疎開時代の藤倉学園では、それまでと同じ処遇内容を実施することは困難となり、川田の教育的治療学の構想と形成も一時的に中断する状況となったことが明らかになった。

(２)得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

石井と川田の精神薄弱児施設ならびに、彼らが滞在したアメリカ精神薄弱児(者)施設を対象にすることによって、日本の精神薄弱児教育史すなわち、知的障害児教育史におけるアメリカのそれとの関係と影響について部分的ではあるが明らかにすることができた。

また、日本の精神薄弱児施設が、アメリカの精神薄弱児施設と同様に終生保護施設化に変化するものの、その施設規模は、アメリカに比べて小規模で家族的な施設運営を目指していたことから、日本の精神薄弱児施設は、日本に土着した文化や習慣との中で、当時の先進国とは異なる精神薄弱児施設の性格を有していたことも明らかになった。

(３)今後の展望

本研究では、石井の滝乃川学園と川田の藤倉学園を対象としたが、とりわけ石井については、彼が滞在及び視察したアメリカの精神薄弱児(者)施設に関する資料を 2 年間という研究期間の間に収集することが困難であった。

そのため、今後は長期的な研究計画に基づき、石井と関連するアメリカの精神薄弱児(者)施設の一次資料を収集するとともに、分析が必要である。

その他には、日本の精神薄弱児施設では、戦争末期になると国内情勢の悪化、空襲、食糧不足等の影響を受け、それまでとは異なる

教育と保護の実践を余儀なくされる。
　そのため、今後は、比較的充実した精神薄弱児教育を行ってきた精神薄弱児施設が、戦争末期の国内情勢の悪化によって、いかなる教育と保護を実践することになったのかについて明らかにすることが必要である。
　とくに、元施設職員等の聞き取りから施設での教育と保護の実態を検討すること、疎開の有無、施設立地条件の観点から施設間で比較することが研究方法として挙げられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2 件）
①高野聡子、松矢勝宏、川田貞治郎の偉績－知的障害がある子どもの教育的治療学の研究と実践－、55 巻、49-55、2008、査読なし
②高野聡子、川田貞治郎の日本心育園における低能児教育としての心練の実践、障害科学研究、32 巻、61-70、2007、査読あり

〔学会発表〕（計　1 件）
①高野聡子、川田貞治郎の藤倉学園における精神薄弱児教育・保護機能とその性格－昭和 13(1938)年頃から昭和 19(1944)年の疎開前まで－、社会事業史学会、2007 年５月 19 日、筑波大学

６．研究組織
(1)研究代表者
高野　聡子(TAKANO　SATOKO)
目白大学・人間学部・講師
研究者番号：00455015
(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし